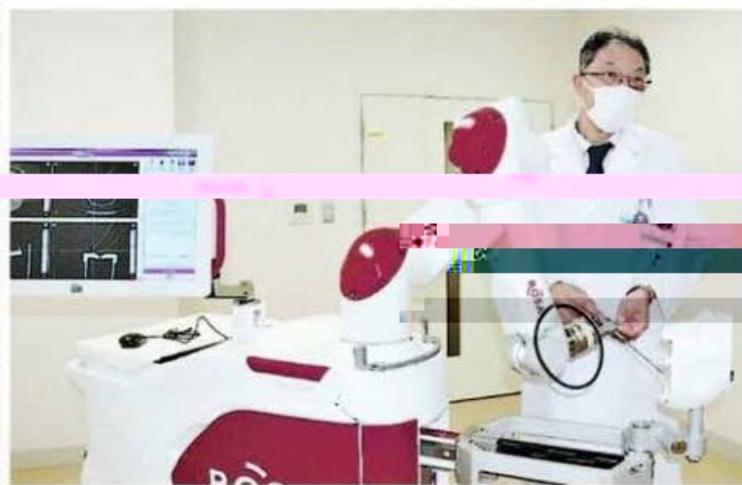


てんかん診断口ボ導入

広島大病院 患者負担や手術時間減



てんかんの
操作する新
手術

診断に使
うロボットを
操作する新
手術

広島大病院(広島市南区)は30日、難治性てんかんの治療部位を決める診断にロボットを使うと発表した。MRIなどで診断がつかない場合は脳に電極を付ける必要があり、従来は頭の骨を切り開く開頭手術をしていた。ロボットを用いると電極の棒を刺す位置がピンポイントで

てんかんの場合は、原因となる。

かり、骨に小さな穴を開けだけで済む。ロボット導入は西日本で初。患者の負担や手術時間を大きく減らすことが見込まれた。

乳幼児以外が対象で手術は2時間ほど。保険が適用され、入院費などを除く手術費用は3割負担の場合、約30万円となる。開頭手術の場合は5~8時間かかり、感染や出血のリスクも高かった。

診断を踏まえ、脳の部位を切除する際は開頭が必要だが、診断のために開頭をする必要がなくなる。広島大病院てんかんセンター長は「体への負担を大きく減らし、安全性も高い。より多くの患者が切除手術を検討できるようになる」と期待している。

(新本恭子)

てんかんの
操作する新
手術

診断に使
うロボットを
操作する新
手術

の脳の部位を切除するケー
ーがある。今月から導入す
る新しい手法では、ロボッ
トがMRIなどのデータと
頭の形状から、十数カ所の
電極を刺す位置を正確に
示す。ロボットのアームは
医師が骨にドリルで穴を
開けたり、電極の棒を差し
込んだりするのを支援す
る。

てんかんの
操作する新
手術

診断に使
うロボットを
操作する新
手術

中国新聞の許諾を得ています

掲載日付 2022年7月1日